ISSN: 2189-793X

Amami Station, International Center for Island Studies, Kagoshima University

島嶼研分室だより

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室

No. 15
2022年9月

企画紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p2
令和4年度から始まる教育研究プロジェクト
『奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」の
革新的融合モデル』について　鈴木 英治
新たなプロジェクトの各班における研究活動紹介
研究紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p4
薩南諸島のボタンボウフウの分布調査と有用成分の地域間差異　志水 勝好
分室活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p4
学生島体験！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p6
奄美の美しい自然にふれて　宮川 真聖
お知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・p7
2022年度鹿児島大学奄美群島島めぐり講演会及び植物観察会開催

令和４年度から始まる教育研究プロジェクト『奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」の革新的融合モデル』について

鈴木（すずき）　英治（えいじ）
（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

日本全国の国立大学法人は、6 年ごとに中期目標を設定しその実現に向けて努力するシステムに従って教育研究を進めています。今年度は、この制度が始まって 4 回目の中期目標期間が始まる年に当たります。昨年度は、第３期中期目標期間の終了年でしたから、その期間の総括と、今年度からの第４期中期目標の目標設定が進められました。奄美分室を発足させ鹿児島大学の奄美群島における研究教育を推進してきたプロジェクトは、1 年間、4 年間、2 年間の 3 つに分かれていましたが、第２期の最終年から始まり昨年度まで続いていました。それらの成果が認められ、第 4 期期間中も予算の名称等は変わりましたが引き続き、奄美分室を中心とした教育研究を続けていくこととなりました。『奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」の革新的融合モデル』という名称のプロジェクトですが、今回は、鹿児島大学の理工学研究科が進めている海のエネルギーや資源の利用を推進する研究計画と一緒になったプロジェクトになりました。理工研のプロジェクトは地方創生に力点を置き、島嶼研が中心となって進めるプロジェクトは今までの 7 年間の成果を継続して「生物と文化の多様性保全」に重点を置いたプロジェクトとなります。それら異質なものを組み合わせることによりより新しいものを作り出せるかもしれません。

奄美群島は昨年に世界自然遺産に登録されましたが、登録はゴールではなく出発点です。世界自然遺産地域として適正に管理していくことが求められています。世界自然遺産への登録により現在奄美群島は注目を集めていますが、それを一時的な流行に終わらせないためにも基礎的な情報の蓄積が必要でしょう。そのために鹿児島大学も努力していかなければなりません。世界自然遺産の管理に直接かかわる研究としては遺産地域の生態系のモニタリングがあります。遺産地域に 400m^2 の調査区を約 20 個前後設定し、そこの動植物を長期間継続観察する体制を作りつつあります（写真）。継続観察により遺産地域の変化を知ることができ、適切な管理に役立てることができます。陸上だけでなく水界に生活するリュウキュウアユや干潟の生物の研究も続けていきます。また最近問題となっている外来種についても、その分布状況の把握に努め、在来生物に大きく影響を及ぼす生物については対策を考えていく必要があるでしょう。

世界自然遺産地域にモニタリング用の
調査区を設定する

奄美群島の生物は人跡未踏な大自然の中ではなく、古代から人の生活の場の近くで人と影響しあいながら存在してきました。人との関わりも考えなければその多様性を十分には理解できません。また人間の文化の多様性も貴重なものです。そのような文化と社会の多様性の研究も推進する必要があります。

得られた研究成果は専門的な論文などとして発表するばかりではなく、地域の人々と共有していく必要があります。奄美群島で行う講演会や勉強会として、地域への還元を図ります。昨年度まで島めぐり講演会として、奄美群島の 5 つの有人島すべてで講演会を開いてきましたが、今年度以降も継続して開催する予定です。野外での植物や動物の観察会も実施します。

新たなプロジェクトの各班における研究活動紹介

全学プロジェクト・ミッション実現戦略分「奄美群島を中心とした『生物と文化の多様性保全』と『地域創生』の革新的融合モデル」において島嶼研が中心となる「多様性保全部会」は学際的な研究を行っており、「陸上植物」、「陸上動物」、「水圏」、「地域研究」の 4 班で構成され、学内教員 44 名、特任教授 1 名、特任研究員 2 名（令和 5 年 4 月着任予定）が参加しています。

奄美大島での植生調査風景（陸上植物班）

奄美大島での鳥類と哺乳類の生息調査風景（陸上動物班）

奄美大島河川におけるリュウキュウアユの調査風景（水圏班）

奄美群島水産業活性化に関する勉強会風景（地域研究班）

薩南諸島における研究の紹介

薩南諸島のボタンボウフウの分布調査と有用成分の地域間差異

志水（しみず） 勝好（かつよし）
（鹿児島大学農学部）

ボタンボウフウ（*Peucedanum japonicum* Thunb.）は東アジアの亜熱帯から暖温帯地域に固有なセリ科カワラボウフウ属の多年草である。沖縄県の海岸から鹿児島県島嶼部の岩場に自生しており長命草と呼ばれ、野菜として食される他、乾燥粉末が販売されている。これはボタンボウフウにはビタミンC、βカロテン、ルテイン、ポリフェノールが豊富に含まれ、多様な抗酸化成分を豊富に含むことが報告されているからである。ボタンボウフウ（広義）は近年ボタンボウフウ（狭義）（*P. japonicum* Thunb. var. *japonicum*）、ナンゴクボタンボウフウ（*P. japonicum* Thunb.var. *austral* M.Hotta et A.Seo）およびコダチボタンボウフウ（*P. japonicum* Thunb.var. *latifolium* M.Hotta et Shiuchi）、に分類される。そこで薩南諸島と県本土におけるボタンボウフウを調査し、その種類の違いと分布に伴う機能性・抗酸化成分の含有量の変化について明らかにすることを目的として研究を行っている。奄美大島の海岸に自生するボタンボウフウ（広義）を調査では、そのほとんどがボタンボウフウ（狭義）であった。しかし、瀬戸内町の海岸の一部ではナンゴクボタンボウフウおよびコダチボタンボウフウに類似したものが観察できた。また昨年度のDNA分析の結果、上記三種の分類のためのマーカー候補の配列を明らかにでき、現在遺伝子型による系統樹からボタンボウフウの島嶼部における伝播経路について分析を進めている。

奄美大島に自生するボタンボウフウ

奄美分室の活動報告（2022年3月～2022年8月）

＜セミナー・観察会等＞

◎第35回奄美分室で語りましょう「住民と学生の協働によるシマづくり」

日時：2022 年 7 月 1 日（水）対面式及びオンライン開催
主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
講師：須山聡（駒澤大学地理学科）

駒澤大学地理学科では宇検村を中心に、学生と住民が協働して、「住み続けられる集落作り」に取り組んでいる。学生たちのユニークな発想にもとづく、住みやすいシマづくりの提案をご紹介していただいた。

奄美分室で講演を行う須山教授

＜奄美分室来訪者数＞

のべ 234 名（2022 年 2 月 16 日～2022 年 8 月 31 日）

＜奄美分室写真紹介＞

大島紬会館に設置された新たな看板

大島紬会館 6 階の奄美分室の横にある未整備の場所を
来年度に向け実験室と講義室に整備を予定している

～学生島体験！vol.15～
「種子島での発掘体験」

宮川 真聖（みやがわ まさきよ）　（法文学部人文学科多元地域文化コース３年）

今年のゴールデンウィーク期間中、国際島嶼教育研究センターが主体となって、種子島西之表市の小浜貝塚で発掘調査が行われた。今回の調査は私にとって非常に学びの多い経験となった。

調査は、砂丘に形成された貝塚を掘り込むというものだった。調査の目的は主に二つあり、発掘で得られた土中から炭化したイネやアワを見つけ出し、種子島における農耕の開始時期を探ることと、貝塚から出土した貝殻や動物・魚の骨をもとに、当時の食生活や自然環境を探ることである。

発掘の結果、貝殻や動物・魚の骨が大量に出土し、土器も出土した。出土した土器の年代から、今回発掘を行った層が弥生時代から古墳時代のものであることが分かった。私自身も、貝殻や動物・魚の骨を掘り出すことができた。先述のように、今回の調査は学術的な目的のもとに実施された発掘調査であった。だから、自分が掘った資料がどのように研究され、そこからどのような歴史が解明されるのか想像しながら掘ることができ、自分が歴史の探求に関わっていることをより実感しながら調査に参加することができた。

中でも、遺物が土の中から姿を現す瞬間は、毎度感動の連続だった。考古学によって解明される歴史のほとんどは、土中から掘り出された一つ一つの遺物や遺構を基に、それらの長期的な研究によって解明される。だから、遺物が土の中から姿を現すその瞬間がすべての歴史の始まりであるといえ、それは、今回のような発掘調査に参加しなければ味わえない。今回も、様々な遺物が出土して、そのたびに感動や興奮の連続だった。今後、これらの資料からどのような歴史が解明されるのか、非常に楽しみである。

今回は人生で二回目の南島の訪問で、鹿児島大学に入学してだんだんと島に来る機会も増えてきた。鹿児島に来るまであまり島のことを考える機会はなかったが、これまでの大学の授業でも、様々な分野で島をテーマとした内容のものが多く、鹿児島において島がそれほど重要であることを知った。特に、今回の調査の舞台となった種子島は、南島の中でも鹿児島本土と最も近い地域にあり、鹿児島と島との関係性を考えるにはうってつけのフィールドだと思った。実際、私が初めて訪問した島である徳之島と比べると、気候など随所に本土と似たところがあると感じた。しかしその中で、やはり島ならではと言われる文化や、ここでしか味わえない雰囲気というものがあった。今回は考古学による調査であったが、こうした島ならではの文化や、その中にみられる本土と共通する文化が、歴史的にどのように作られていったのか探るきっかけになると思う。鹿児島大学の学生として、そして考古学を学ぶ学生として今後の調査成果を見守るとともに、その一助となれる機会があれば、また調査に参加したいと思う。

2022 年度 鹿児島大学
奄美群島島めぐり講演会及び植物観察会開催のお知らせ

鹿児島大学国際島嶼教育研究センターでは、奄美群島の生物多様性や自然と人との関わりについて焦点を当てた研究を行い、教育に生かすプロジェクトを進めております。その一環として、本センターでは奄美群島の各島を巡りながら、研究成果を島のみなさまに還元することを目的とした「鹿児島大学奄美群島島めぐり講演会」を対面式で、「植物観察会」を現地にて開催します。尚、新型コロナウイルス感染拡大の折には、やむをえず講演及び観察会が中止になる場合があります。ご了承ください。

主催：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター・全学プロジェクト・ミッション実現戦略分「奄美群島を中心とした『生物と文化の多様性保全』と『地域創生』の革新的融合モデル」
共催：奄美群島広域事務組合
後援：与論町、徳之島町、龍郷町、喜界町、知名町

〈島めぐり講演会〉

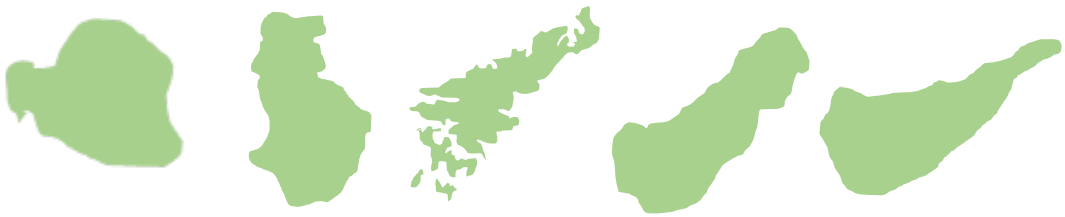
【開催日】

第 19 回　2022 年 11 月 26 日（土）　与論島（与論町役場 1 階 多目的ホール）
第 20 回　2022 年 12 月 24 日（土）　徳之島（徳之島町井之川 223-2 みらい創りラボ井之川）
第 21 回　2023 年 1 月 21 日（土）　奄美大島龍郷町（龍郷町役場）
第 22 回　2023 年 2 月 11 日（土）　喜界島（喜界町役場コミュニティーセンター多目的室）
第 23 回　2023 年 2 月 18 日（土）　沖永良部島知名町（知名町中央公民館）

Google フォームからの申し込み

https://forms.gle/w3djJq8bED8ZU3Q56

参加費不要
参加方法：定員までは申し込まなくても参加できますが、
定員超過の場合には事前申し込みの方を優先します。
問い合わせ・申し込み先：
鹿児島大学国際島嶼教育研究センター（担当　西）
＜Tel＞ 099-285-7394
＜メール＞ shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp
資料の準備の都合などもありますので、なるべく事前にお申し込みください。
なおリモート視聴はできません。



〈植物観察会〉

【開催日】

2022 年 11 月 27 日（日）　与論島

2022 年 12 月 25 日（日）　徳之島

2023 年 2 月 12 日（土）　喜界島

※要事前登録（各回開催日 1 週間前まで）。

問い合わせ先：

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター（西）

〈電話〉099-285-7394

〈メール〉tousho@cpi.kagoshima-u.ac.jp

お知らせ

奄美分室事務補佐をされていた生美香子さんが 2022 年 8 月より産休に入りました。これにともない 8 月より財部みのりさんに事務補佐を務めていただいています。

奄美分室に長期常駐をしていた高宮広土教授は 20022 年 4 月より島嶼研センター長に就任しました。このため、2022 年度 4－5 月は山本宗立准教授、6－7 月は大塚靖准教授、そして 8 月－2023 年 3 月は河合渓教授が常駐することになりました。

今後とも島嶼研および奄美分室へのご支援ご協力のほど、どうぞよろしくお願いします。

編集後記

2022 年 8 月より 2023 年 3 月まで奄美分室に常駐することになりました。昨年度まで行っていた奄美分室が中心となっていたプロジェクトが終わり、他の分室所属メンバーも大きく変わったこともあり、分室は新たな分室に変わりつつあると思います。

分室だよりをやっと出版することができました。本年度から出版担当になったことや、夏には色々なイベントの企画運営に携わってきたので、出版がとても遅くなってしまいました。今後は順調な出版を進めたいと思います。

河合　渓

島嶼研分室だより No. 15

令和 4 年 11 月 25 日発行
鹿児島大学
国際島嶼教育研究センター奄美分室
〒894-0026
鹿児島県奄美市名瀬港町 15-1 奄美群島大島紬会館 6 階
TEL: 0997-69-4852　FAX: 0997-69-4853
E-MAIL: amamist@cpi.kagoshima-u.ac.jp
http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/AmamiStation/

表紙写真：
奄美大島の森と海の風景
（撮影：2022 年 8 月、河合　渓）

ISSN: 2189-793X